

ひょうご

—神と仏—

伝説紀行

大猪と狩人忠太  
ほら穴にかがやく本当の姿

松帆神社の曲がり松  
神様たちの待ちぼうけ

春日の鹿と八幡の牛  
室津と生穂の村ざかい

伝説

大猪と狩人忠太

ほら穴に輝く本当の姿  
松帆神社の曲がり松  
神様たちの待ちぼうけ  
春日の鹿と八幡の牛  
室津と生穂の村ざかい

紀行

暮らしとともに・淡路の神様、仏様

- ・松帆神社の曲がり松
- ・生穂賀茂神社と室津八幡神社
- ・信仰を集めた先山
- ・歴史を伝える社寺と恋の森

関連情報

用語解説  
参考書籍  
所在地リスト

歴史博物館ネットミュージアム  
ひょうご歴史ステーション

## 大猪と狩人忠太

### ほら穴にかがやく本当の姿

今から千年以上も前の、延喜（えんぎ）元年のことです。播磨国（はりまのくに）に、かりうどの忠太（ちゅうた）という男が住んでいました。たいそうな弓の名人で、毎日のように山へ入っては、たくさんのえものをもって暮らしておりました。

ある日のことです。いつものように、忠太がえものを肩から下げて山を下りてくると、仲間のかりうどに出会いました。

「おい忠太、おまえ、上野の山おくに大猪（おおいのしし）が出るちゅう話を聞いたか」

「いいや、そんな話は知らん。大体、どれくらい大きいんや」

「うわさで聞いたんやけど、身のたけが三十尺もあって、山みたいに大きいそうや。なんでも背中にはササがびっしりはえとるらしい。あんまりおそろしいて、近寄ることもできへんのや」

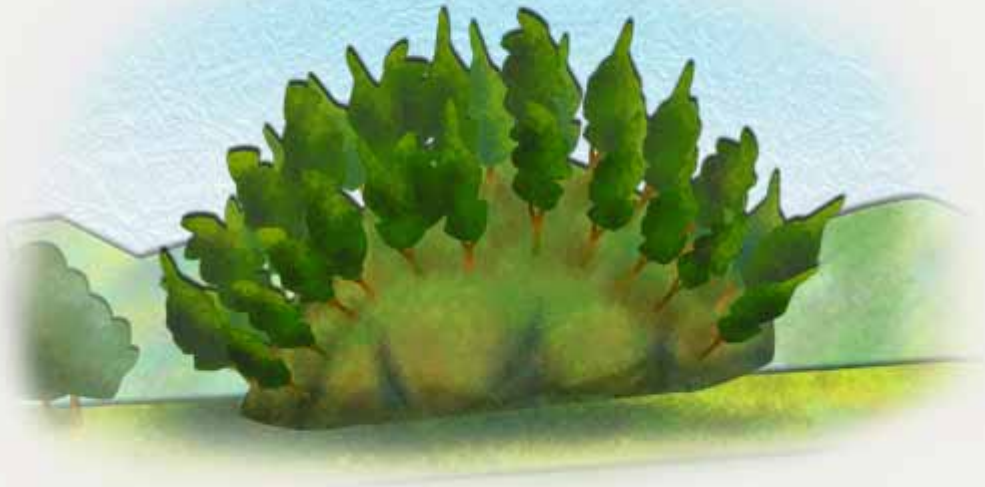
その大猪の名は、「いざさ王」というのでした。いざさ王は里へ下りてきては田畑をあらし回るので、上野の人たちは困り果てているということです。それを聞いて、忠太は大喜びしました。近ごろますます上達し、ねらったえものはにがさない弓のうで前を、その怪物（かいぶつ）相手にためしてみたかったです。忠太はさっそく、上野の里へ出かけてゆきました。

山おくへと分け入って待ちかまえていると、やがてはるか遠くから、ごおーっという山鳴りのような音がひびいてきました。これこそいざさ王にちがいありません。忠太は矢をつがえて待ち構えました。



しかし現れたいざさ王を見て、さすがの忠太もきもをつぶしました。背中に生えた木やササがごうごうとゆれて、まるで山全体が動いているみたいです。けれども忠太が必死の思いで放った矢は、大猪の胸にぐさりときささりしました。

ところがいざさ王はびくともしません。そのまま南へ南へと、ものすごい勢いで走ってゆきます。「にがすものか」と、忠太もけんめいに後を追いかけてきました。



やがて海へ出ると、いざさ王はそのまま海に飛びこんで泳ぎはじめました。そして播磨灘（はりまなだ）を横切り、鹿ノ瀬（しかのせ）もこえて、とうとう淡路島（あわじしま）まで泳ぎ着いてしまいました。忠太も船に乗って、いざさ王の後を追います。

いざさ王はそのまま走り続けて、とうとう先山（せんざん）の頂上にまでたどりつき、そこでふっとかき消すように見えなくなってしまいました。

忠太もその後を追って、山の頂上にやってきました。見ると、矢がささった傷口からこぼれたらしい血のあとがあります。血のあとは、山頂近くにある大きな杉の木の、根元に開いたほら穴まで続いていました。

「ははあ、あの中にかくれたな」

忠太はもう一度矢をつがえると、足音をしのばせながらほら穴へと近づいてゆきました。ところが、暗いはずのほら穴の中が、明るくかがやいています。おまけに、手の力がぬけてしまって、どうやっても弓を引きしぼることができません。一体どうしたことだとおどろいているうちに、忠太は、何かに引きよせられるようにほら穴の中へと入ってゆきました。

「あっ」

忠太は思わず、手にしていた弓矢を投げ出すと、その場にひれふしてしまいました。ほら穴のおくには、千手観音（せんじゅかんのん）様の像が立っていて、その胸元に、忠太の矢が深々とつきささっているではありませんか。忠太は真っ青になり、ぶるぶるふるえだしました。人々を救ってくださる観音様を、よりによって弓で射るとは、何ということでしょう。

「ああ、これは日ごろ鳥やけものの命をうばっている私に、殺生（せっしょう）はいけないことだと、観音様が身をもって教えてくださったのだ。何とおそれ多いことだろう」



忠太は、これまでたくさんの鳥やけものの命をうばったことを、心から悪かったと思いました。そこでさっそく出家し、名前も寂忍（じゃくにん）と改めました。そしてこの観音様をお祭りすることにしました。

忠太の話は、都の醍醐天皇（だいごてんのう）にまで聞こえました。このありがたい話を聞いた天皇は、さっそく、先山の頂上に大きな寺を建てて、千手観音様を祭るように命じました。これが、先山千光寺の始まりだということです。

さて、播磨に残された忠太の家族は、いつまでたっても帰ってこない忠太をさがして、淡路島までやってきました。しかし忠太は、家族に会おうともしなかったそうです。先山の近くまで来ながら、会えないことを悲しんだ忠太の子供は、そこにあった石の上に上って先山の方に向かい、父の名をよび続けました。やがてその石が二つに割れてしまったので、今でも、その土地は、「二つ石」と呼ばれているということです。

大猪と狩人忠太 ほら穴にかがやく本当の姿

おわり

## 松帆神社の曲がり松 神様たちの待ちぼうけ

古くから、十月のことを「神無月（かなづき）」と呼んでいます。なぜかという、日本中の神社にいる神様が、この月だけはそろって出雲国（いずものくに）にある出雲大社（いずもたいしゃ）に集まって、一年のことを話し合われるため、どこの神社でも神様がいなくなってしまうからです。日本中から神様が集まる出雲国では、「神無月」といわずに「神在月（かみありづき）」と呼んでいるそうです。



「ああ、また出雲へ出かける神無月になったなあ」

ある年のこと、淡路島（あわじしま）にある松帆神社（まつほじんじゃ）の八幡様（はちまんさま）は、うれしそうにつぶやきました。神無月には、島中の八幡様が集まって、いっしょに出雲まで出かけることになりました。松帆神社の八幡様は、いつもは見られない景色を見たり、あちこちの神様と話ができるので、この旅をとても楽しみにしていたのです。

やがて出発の日がやってきました。淡路のあちこちから集まってきた八幡様たちは、二人、三人と連れだって浦（うら）の港へ集まってきました。岩屋の八幡様は、みんながそろったかどうか見回していましたが、松帆の八幡様が見えないようです。

「おやおや、松帆の八幡様はまだおこしではないようですね。私が行って呼んでみましょう」  
そう言ってかけだしていった岩屋の八幡様のあとを、ほかの八幡様たちもぞろぞろとついてゆきました。

「松帆の八幡様、もうみんなそろっておりますよ。そろそろお出まし下さい」

呼びかけられて、松帆の八幡様は顔を出しました。

「おやみなさま、もうお集まりでしたか。私もさっそく準備しますから、しばらくお待ち下さい」

松帆の八幡様はそう言って、おくへ入って行きました。ところがお社の中からは何かことごと、がたがたと音がするのですが、松帆の八幡様はなかなか出てきません。ほかの八幡様たちはだんだんと待ちくたびれてきました。

「やれやれ、まだだいぶんかかりそうだな」

「しばらくこしかけて休んでいよう」

八幡様たちは、境内にある松の木の枝にこしを下ろして休みました。あんまり長い間、こしを下ろしていたものですから、枝はじわじわと曲がりはじめ、とうとう地面をはうように曲がってしまいました。

それで、松帆神社の松の木は、「曲がり松」と呼ばれるようになったのだそうです。



松帆神社の曲がり松 神様たちの待ちぼうけ  
おわり

## 春日の鹿と八幡の牛 室津と生穂の村ざかい

むかしむかし、淡路島（あわじしま）の室津（むろつ）の村と、となりの生穂（いくほ）の村は、境がはっきりしていませんでした。村と村との境がはっきりしていないと、何かと不便なことや争いごとがおこったりします。室津にいらっしゃった八幡様（はちまんさま）は、どうにかして村境をはっきりさせたいと考えました。

「室津の村ができるだけ広い方がいいなあ」

八幡様は、生穂の春日大明神（かすがだいみょうじん）と相談して、村境を決めるのがよかろうと思い立ちました。

そこである日、八幡様は生穂の春日大明神を訪ねて、こんなふうにご相談しました。

「同じ日の同じ時刻に室津と生穂から出発して、出会ったところを村境にするというのはどうでしょう」

「それはよい考えですね」

「春日大明神は鹿（しか）に乗って、私は牛に乗ってでかけるということで、いかがでしょう」

「そうしましょう」

その翌日、ちょうどお日様が頭の真上にやって来たとき、二人の神様はそれぞれに出発しました。春日大明神が乗った鹿は、身軽に、どんどん走って行きます。急な山道もぴょんぴょんと飛ぶようです。一方の室津の八幡様が乗った牛は、なんともゆっくりと歩いて行きました。坂道にさしかかると、ますますゆっくりです。

とうとう大坪（おおつぼ）の坂を登り切らないうちに、春日大明神と出会ってしまいました。



「しまった、これでは室津の村が何ともせまくなってしまおう」  
そう思った室津の八幡様は、春日大明神にたのみこみしました。  
「たいへんもうしわけないのですが、もう一回やり直しにしてくれませんか」  
「やり直しですか。構いませんよ。今度はどうしましょうか」

春日大明神が、そう言ってくれましたので、室津の八幡様はこんなふうに言いました。

「今度は、室津から矢を放って、それがつきささったところを村境ということにしてくれませんか」  
そういうわけで、また別の日。今度は室津から矢を射ることになりました。今度こそと考えた室津の八幡様は、ものすごく大きな弓と矢を探し出しました。やってきた春日大明神もびっくりするほど大きな弓です。

その弓に矢をつがえて、室津の八幡様はぐうっとひきしぼりました。顔を真っ赤にしなが、うんうんと弓を引きしぼった八幡様は、「えいっ」とばかりに矢を放ちました。矢はぐんぐんと飛んでいって、大坪の坂をこえ、三笠松（みかさまつ）のある釈迦堂（しゃかどう）にぐさっとつきささりました。前よりもずっと広がったので、室津の八幡様は大満足です。

「無理な願いを聞いてくださって、ありがとうございました。そのお礼に、これからは、室津にあるものでも、春日大明神様がお望みのものは差し上げるようにいたします」

そういうわけで、毎年六月のお祭りには、生穂の人が大勢室津のはまにやってきて、潮浴びをしたり、その後で木の枝をとってたきぎを作ったり、はまにある石を生穂に持って帰ったりするようになったということです。



春日の鹿と八幡の牛 室津と生穂の村ざかい  
おわり



## 紀行「暮らしとともに・淡路の神様、仏様」

いつも村にいる神様や仏様は、人々のそばにいて困ったときは助けてくれ、時には身をもって人々を教え導いてくれるものだ。時にはあわてて大失敗をすることもあっても、だれからも親しまれ、敬われる存在だ。今回、淡路島から取り上げた物語も、そんな神様・仏様の物語であった。

### 松帆神社と曲がり松



鳥居から門を見る

宮司（ぐうじ）さんのお話では、伝説の曲がり松は枯れてしまったという。ついうっかりしてい

て、どこにあったものか聞きそびれてしまったが、境内にはいくつか切り株もあったから、そのひとつが曲がり松だったのだろう。『兵庫県大百科事典』下巻の松帆神社の項を見ると、門前の広場に、地をほうように曲がった松の幹が写った写真が掲載されている。

海が穏やかな日には、門前の松の木に腰かけて、のんびりと景色をながめていたい。そんな気持ちにさせてくれる場所である。松帆神社は、応神（おうじん）・仲哀（ちゅうあい）の両天皇と神功皇后を祭神としており、明治初めごろまでは八幡宮と呼ばれていたという。

明石海峡（あかしかいきょう）にかかる大橋を、わずか数分で渡り終えると淡路島である。そこから国道28号線に降り、東海岸に沿って7kmほど南下したところに松帆神社（まつほじんじゃ）がある。松の若木がまっすぐに伸びる境内には明るい日光が降り注ぎ、潮風が通りすぎてゆく。



松帆神社（境内）



松帆神社（拝殿）



松帆神社（本殿）



松帆神社（看板）



狛犬ではなく亀



亀に耳がある？

### 生穂賀茂神社と室津八幡神社

松帆神社からさらに15kmほど南下すると、生穂の集落である。生穂の交差点で、国道28号線から県道123号津名北淡線に入り、500mほど山側へ入った場所にあるのが賀茂神社である。

高台にある境内からは、村の周辺が広く見渡せる。東には海が開け、西は山地にさえぎられた、淡路の東浦（ひがしうら）らしい、いかにものどかな風景が連なっている。

由緒略記によると、この地域に京都上賀茂神社の荘園が置かれていたことから、賀茂神を祭るようになったという。後にはこれに加えて、白鬚神（しらひげのかみ）、貴船神（きふねのかみ）、伝説にある春日神（かすがのかみ）などを合わせ祭ったため、四社明神とも呼ばれるようになったということなので、伝説で取り上げた春日の神様も、元は別の場所でお祭りされていたのだろう。

賀茂神社の裏山は、雨乞山（あまごやま）と呼ばれ、干ばつの年には頂上で火を焚いて雨乞いをするそうである。こちらの方は、水の神様である貴船神の仕事ということになるだろうか。



生穂賀茂神社（鳥居）



生穂賀茂神社（本殿）



生穂賀茂神社（看板）



願いが叶う石

賀茂神社の前から県道123号線を北西に進むと、やがて淡路島の中央をはしる山地にさしかかる。道幅が狭い所も多い。この山地のために、淡路島の東部と西部は、そう遠いわけではないのに交通は不便である。道も整わない時代であれば、春日の神様を乗せた鹿なら身軽に越えられただろうが、八幡様を乗せた牛では、少々息切れしたかもしれない。



室津八幡神社（本殿）

その室津八幡神社（むろつはちまんじんじゃ）は淡路市室津にある。室津の港から、まっすぐに100mほど続く石畳の参道を入ると、西に向けたまだ新しい社殿が建っている。1995年の震災で大きな被害を受けた後、再建されてまだ日が浅いとのことである。

八幡神は、本来は「やはたのかみ」と読み、農耕の神、海の神、あるいは鍛冶（かじ）の神とされているようだ。後には応神天皇が祭神とされ、さらには神仏習合の流れの中で「大菩薩」と呼ばれるようになったそうだが、伝説に出てくる八幡様は、土地に根を下ろした、古い神様の姿をとどめているように思える。

境内から見ると、鳥居の先には港に並んだ船、その先には瀬戸内海が見渡せる。ことに夕焼けの時間には、とてもきれいな景色が見られる場所である。村境を決めるといふ、どちらかという「利」に関係した話でありながら、とてもユーモラスに、争いごともなく描かれた伝説は、淡路という穏やかな風土に似合ったお話だと、夕日を見ながら思った。



室津八幡神社（門）



門をくぐる



夕暮れの海を望む

## 信仰を集めた先山



先山

先山は、洲本市（すもとし）の北西にある。標高は448m、優美な山容から「淡路富士」とも呼ばれているようで、千光寺はその山頂にある。ふもとからはいくつかの登山道があると思うのだが、伝説紀行の取材では車で登らせてもらった。洲本市下内膳（しもないぜん）の村を抜けると、あとは山を登る道で、さしたる難所もなく頂上直下の茶店近くまで行くことができる。

そこからは徒歩で、けっこう長い階段を登らねばならない。



階段を上る



境内へ



三重塔



鐘楼

深い朱色に塗られた門をくぐると、木立に囲まれた静かなたたずまいの三重塔が目に入る。江戸時代に建てられたものである。その奥の本堂前には、狛犬ではなく石造りの猪が左右を守っているが、これは他では見られない風景ではないだろうか。



狛犬ではなく猪

鎌倉時代の隆盛から、戦乱での荒廃を経て16世紀中ごろ以降に復興した千光寺は、淡路西国三十三箇所第一番の札所となり、また六十六部廻国納経（かいこくのうきょう）の霊地としても繁栄したそうである。室町時代に描かれた「千光寺参詣曼荼羅（せんこうじさんけいまんだら）」には、立派な本堂や三重塔のほかにも多数の建物が見られ、寺の繁栄がしのばれる。その曼荼羅の隅には、大きな木の洞に立つ千手観音が描かれている。

千光寺の縁起となった「大猪と狩人忠太」の話は、淡路の人々には深く浸透したお話で、千光寺だけでなく周辺にも、この伝説に関わる地名が残されているという。人々が毎日仰ぎ見る山は、信仰の山であると同時に、身近な土地の歴史を語るためになくてはならない心の故郷だったのではないだろうか。



千光寺からの眺望



千手観音の大提灯



日本真景播磨  
・垂水名所図帖



淡路名所図絵

## 歴史を伝える社寺と恋の森



広田八幡神社  
(鳥居)



広田八幡神社 (境内)



広田八幡神社 (看板)



淡路名所図絵

千山から3kmほど南の、南あわじ市広田広田には、広田八幡神社と大宮寺がある。源頼朝が平氏追討の戦勝祈願のために、現在の西宮市にある広田神社へ、淡路の広田荘を寄進したことが起源となったという広田神社は、大宮寺とともに『淡路名所図会(あわじめいしよづえ)』にも描かれている。



縄騒動の碑



大宮寺 (本堂)



大宮寺 (看板)

その大宮寺の裏山には、江戸時代、淡路で起きた最大の一揆である「天明の縄騒動」に殉じた人々を供養する塔がある。首謀者とみなされた二人は処刑されたが、今もこの場所では、命日である3月23日に、天明志士大祭が営まれているそうである。背後の山には、淡路島一という広田梅園もあるので、花の季節にはぜひ一度訪ねてみたいと思う。

広田八幡神社と大宮寺から、400mほど南にある恋の森荒神には、伝説としては少し異色の、ロマンチックな物語が伝わっている。



恋の森



仲良く並んだ祠

今でこそ住宅地の一角になってしまっているけれど、かつてこのあたりには森が広がり、そこで仲良く遊んでいた男の子と女の子が、やがてめでたく結ばれて、末永く幸せに暮らしたという伝説から、いつしかこの場所は「恋の森」と呼ばれるようになったという。新婚の夫婦が荒神へお参りすれば末永く幸せに過ごすことができ、もしも夫婦仲が悪くなった時には、この荒神さまの前でむつまじく語り合えば、もとの恋人同士に戻れるとも伝えられている。

伝説や荒神様の起源はわからないようだが、幸せをもたらす「恋の森」として、地元の人々は大切に守り続けている。伝説にあやかりたい人はいませんか。



恋の森神社  
(鳥居)



恋の森神社  
(看板)

## 用語解説

### 松帆神社（まつほじんじゃ）

淡路市久留麻（くるま）に所在する神社。祭神は応神天皇、仲哀天皇、神功皇后。社伝では、楠木正成が湊川の合戦で戦死した際、家臣が正成の守護神である八幡大神を久留麻の地に祭ったのが始まりと伝える。明治14（1881）年に松帆神社と改称した。宝物として、後鳥羽上皇（1180～1239）の時代に皇室刀鍛冶筆頭であった福岡一文字則宗（ふくおかいちもんじのりむね）の「菊一文字」（国指定重要美術品）、伎楽面ほか多数を蔵する。

### 応神天皇（おうじんてんのう）

『日本書紀』によれば第15代の天皇。仲哀天皇（ちゅうあいてんのう）の皇子で、母は神功皇后とされる。名は誉田別命（ほむたわけのみこと）。記紀によれば在位は41年で、西暦310年に111歳あるいは130歳で没したとされる。伝説的色彩の強い天皇であるが、『宋書』の東夷伝に見える倭王讃（さん）を、応神天皇にあてる説がある。陵墓は大阪府羽曳野市（はびきのし）に所在する、誉田御廟山古墳（こんだごびょうやまこふん）に比定されている。誉田御廟山古墳は、全国で第2位の、全長425mを測る前方後円墳で、築造は5世紀前半と考えられている。

### 仲哀天皇（ちゅうあいてんのう）

記紀によれば第14代の天皇で、没年は西暦200年。陵墓は、大阪府藤井寺市の岡ミサンザイ古墳（前方後円墳、全長242m）に比定されている。記紀ではヤマトタケルノミコトの子とされているが、記載された没年と年齢から計算すると、父の死後36年を経て誕生したことになる点、名の「タラシナカツヒコ」に用いられる「タラシ」が、7世紀代に実在した天皇の名にも用いられている点などから、架空の天皇とする説もある。

### 神功皇后（じんぐうこうごう）

『日本書紀』によれば、第14代仲哀天皇（ちゅうあいてんのう）の皇后。名を息長足姫尊（おきながたらしひめのみこと）という。仲哀天皇の死後、これに代わって朝鮮へ出兵して、新羅を討ち、百済・高句麗を帰服させたとされるが、これは日本を大国として位置づけるための架空の説話である。

### 生穂賀茂神社（いくほかもじんじゃ）

淡路市生穂（いくほ）に所在する神社。生穂に京都の上賀茂神社の荘園が置かれていたことから、当地でも賀茂神（かものかみ）が氏神として祭られるようになったとされている。後に、春日神（かすがのかみ：智神）、貴船神（きぶねのかみ：水神）、白鬚神（しらひげのかみ：土神）も祭られるようになったことから、四社明神とも呼ばれて崇敬が厚い。

### 上賀茂神社（かみがもじんじゃ）

京都市北区上賀茂に所在する式内社（しきないしゃ）。正式名称は賀茂別雷神社（かもわけいかずちじんじゃ）。山城国一宮。賀茂御祖神社（下鴨神社）とともに、古代賀茂氏の氏神（賀茂別雷大神）を祭る。葵祭（あおいまつり）は京都三大祭の一つとして有名。桓武天皇（かんむてんのう）が平安京に遷都して以来、都を守る神として祭られてきた。神社としては伊勢神宮に次ぐ地位にある。

## 用語解説

### 荘園（しょうえん）

奈良時代から戦国時代まで存在した、田地を中心とした私有地。所有者は、主として貴族や寺社で、政治的地位を有する者であった。現在、文献で知られる荘園は4,000か所近くあり、東北地方から九州地方まで分布するが、特に近畿地方に集中している。

### 八幡神（はちまんしん）

農耕神または海の神とされている。総本社は大分県宇佐市の宇佐神宮（宇佐八幡宮）であるが、全国に数千の神社があり、稲荷社に次ぐ信仰を集めている。元は宇佐地方一円にいた大神氏（おおみわし）の氏神であったとも考えられているが、現在では、応神天皇、神功皇后、比売神の3神を合わせて八幡神（八幡三神）として祭られている。

### 先山（せんざん）

洲本市北西にある山。標高は448m。その山容から、淡路富士とも称される。山頂には千光寺が建つ。江戸時代の画家、谷文晁（たにぶんちょう）の『名山図譜』にも描かれるなど、古くから知られる山である。シイ、カシなどの暖帯樹林に覆われ、この山系にのみ生息する昆虫も知られている。

### 千光寺（せんこうじ）

洲本市上内膳（かみないぜん）の、先山山頂に所在する真言宗の寺院。先山（せんざん）と号する。本尊は千手観音。寺伝によれば、平安時代延喜元（901）年の開基とされ、縁起として狩人忠太と大猪の伝説が伝えられている。このほか『淡路通記（あわじつうき：17世紀末成立）』には、性空上人（しょうくうしょうにん）、役小角（えんのおづぬ）やイザナギ・イザナミにまつわる伝承が記録されている。境内の鐘楼にある鐘は、弘安6（1283）年の銘をもち、重要文化財に指定されている。

### 札所（ふだしょ）

仏教の霊場で、参詣したしるしに札を受けたり、納めたりするところ。西国三十三箇所、四国八十八箇所など。

### 六十六部廻国納経（ろくじゅうろくぶかいこくのうきょう）

法華経を書写し、全国の66か国の霊場に1部ずつ納経する巡礼行。この巡礼に従事する行者を六十六部行者、廻国聖（かいこくひじり）などと呼ぶ。鎌倉時代末から室町時代にかけて流行した。兵庫県下でも、神戸市北区淡河町（おうちょう）の勝雄経塚（かつおきょうづか）で、経巻を入れた金銅製の経筒が発掘されている。

### 広田八幡神社（ひろたはちまんじんじゃ）

南あわじ市広田広田に所在する神社。祭神は応神天皇。寿永3（1184）年、平家追討中の源頼朝が摂津の広田社（西宮市）に広田荘を寄進し、戦勝を祈願したことに始まるという。神社は明治32（1899）年に失火で全焼し、現在残っている社殿は4年後に再建されたもの。隣接して広田梅林があり、観光地となっている。

### 大宮寺（だいぐうじ）

南あわじ市広田広田に所在する真言宗の寺院。広林山（こうりんざん）と号する。本尊は阿弥陀如来。開基は不詳であるが、安土桃山時代に中興された。かつては末寺や奥の院も有していたとされ、奥の院跡からは、平安時代末期の瓦が出土している。

## 用語解説

### 源頼朝（みなもとのよりとも）

鎌倉幕府初代将軍（1147～99）。源義朝（よしとも）の三男。平治の乱で敗走する途中捕らえられ、伊豆へ流された。その後、以仁王（もちひとおう）の令旨により挙兵し、一度は敗れたものの関東地方の武士の支持を受け、鎌倉で政権を樹立した。のち、源範頼（のりより）・義経（よしつね）らを大将として、源義仲（よしなか）、平氏一門を討って京都を確保した。平氏滅亡後は、院に接近していた義経を追い、その追捕を理由として諸国に守護・地頭を置いて政権を確固たるものとした。1192年、征夷大将軍に任ぜられた。

### 淡路名所図会（あわじめいしよずえ）

18世紀末～19世紀初めに制作された名所図会。当時の名所旧跡、寺社などが描かれた肉筆本である。編者は不明。淡路の名所を記した書物としては、暁鐘成（あかつきのかねなり）が編纂した『淡路国名所図絵』（1851）が知られているが、本書は内容が全く異なる。当時の景観などを知る上で重要な資料。

### 天明の縄騒動（てんめいのなわそうどう）

天明2（1782）年に起こった淡路島最大の農民蜂起。当時淡路を領していた徳島藩が出した「増米法」と「木綿会所法」によって、農民は生活を圧迫されていた。ここへさらに、洲本の藩庁役人が出した縄を供出させて大坂で販売するための法を出したため、合計12か村の農民が、下内膳村の組頭庄屋であった広右衛門方へ押し寄せて、法の廃止を陳情した。これに対して徳島藩は縄供出の法などを廃止し、藩の責任者を処分したが、一揆（いっき）の首謀者も捕縛され、広田宮村の才蔵と山添村の清左衛門は打ち首となった。この両名の供養碑は、島内に4基が残されており、大宮寺境内には事件の記念碑がある。

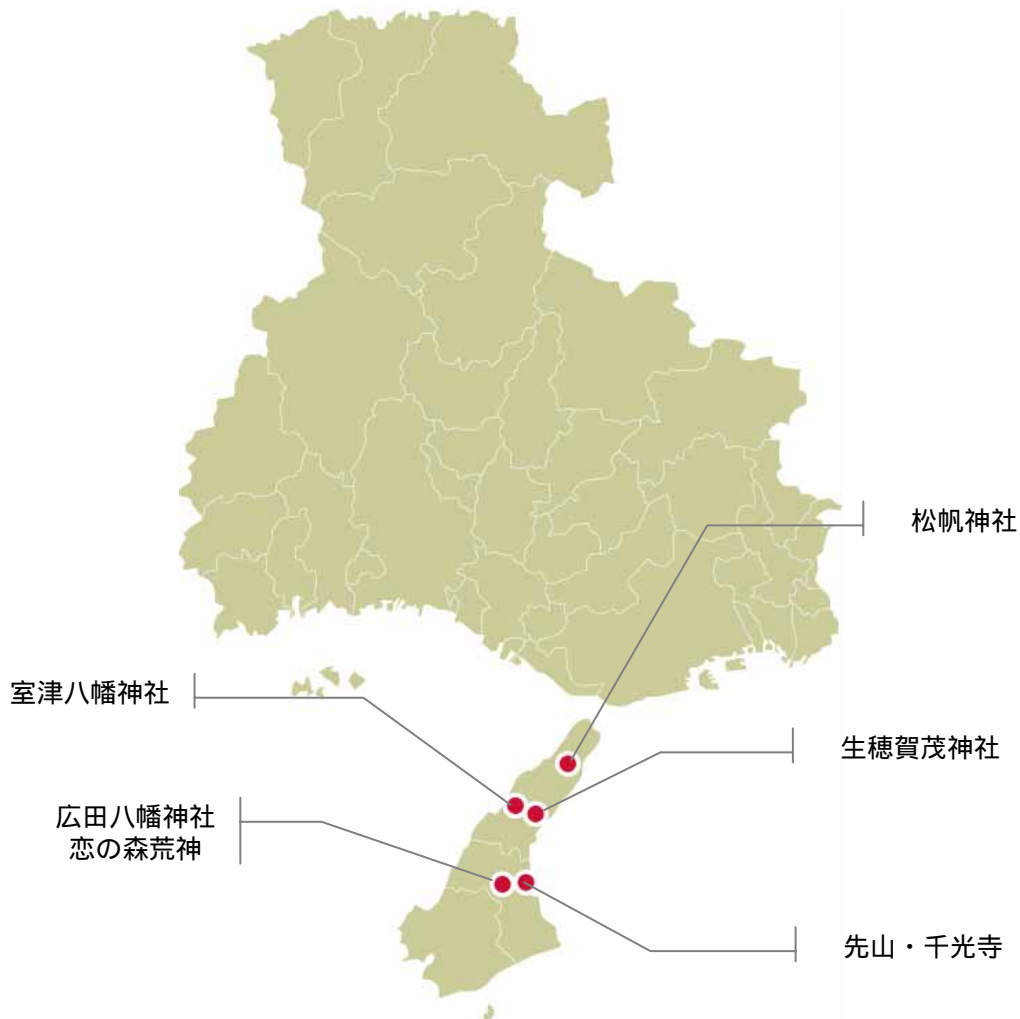
### 荒神（こうじん）

「猛々しい神」の意味をもつ言葉であるが、同時に靈験ある神をも指す。また、三宝荒神（さんぼうこうじん：仏教の三宝（仏・法・僧）を守護する神）を指す。三宝荒神は不浄を忌み、火を好むとされることから、近世以降はかまどの神として祭られた。

## 参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	郷土の民話淡路篇	1972	郷土の民話淡路地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
	兵庫の伝説	1980	兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
	あわじの昔ばなし	1985	濱岡きみ子	神戸新聞出版センター
歴史・文化	兵庫のふるさと散歩6 淡路編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	21世紀兵庫創造協会
	日本考古学小辞典	1983	江坂輝彌・芹沢長介・坂詰秀一編	ニューサイエンス社
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	神戸市北区勝雄経塚 - 山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXV -	1997	兵庫県教育委員会	兵庫県教育委員会
	長澤誌 - 今に生きる先人のぬくもり -	2004	濱岡きみ子	長沢町内会
	津名の文化財	2005	津名町	津名町
その他	賀茂神社由緒略記	不詳	生穂賀茂神社	生穂賀茂神社
	自凝島神社由緒略記	不詳	自凝島神社	自凝島神社
	原色日本植物図鑑木本編	1979	北村史郎・村田源	保育社

## 所在地リスト



先山・千光寺	洲本市上内膳2132
広田八幡神社	南あわじ市広田広田1034
恋の森荒神	南あわじ市広田広田300付近
大宮寺	南あわじ市広田898
松帆神社	淡路市久留麻257
室津八幡神社	淡路市室津1860
生穂賀茂神社	淡路市生穂2505

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2008年4月1日